

再会

「先生、私は沖中の生徒でした。」三時のお茶の時間、私は先生の耳元で話しかけてみた。静かな食堂の空間から四十三年前の秋の賑やかな情景が浮かんでくる。

自宅から車で10分程の介護施設に調理員として私は働き始めた。30人余りの入居者様の食事とおやつを二人の調理員で考え、買い物をして作らなければならない。硬さも四段階、除去食、特別食と初めての仕事に私は緊張の毎日だった。入居者様の中におぼろげに記憶のある顔が目に留まったがお話する余裕など私にはなかった。二か月が過ぎ、何とか仕事にも慣れてきたある日、私は職員にその方のことを尋ねてみた。「Oさんなら以前学校にお勤めされてたみたいよ。」やはり中学校時代の体育のO先生だった。先生は糖尿病から脳梗塞を患い、寝たきりの状態だったが職員の手を借りて車椅子で食堂にいられていた。首の固定がついた特別な車椅子だ。嚥下が困難となってきた最近では胃ろうの話も出ていた。私は先生の隣に座り当時の体育祭の話を始めた。話すことも聞くことも出来ない先生に届いているかはわからない。晴天の秋空の下、先生は真っ白な上下のジャージに首から笛を下げて運動場を走り回っていた。大規模校の体育祭が先生の合図で進行していた。体育主任としての責任感と情熱で先生の上気した顔は輝いていた。プログラムは順調に進み、最終種目の地区対抗リレーまで会場は熱気と興奮に包まれながら体育祭は終わった。「先生、本当に思い出に残る体育祭でした。ありがとうございました。」頭を下げ話し終わると先生のお顔は真っ赤になり眼には涙を浮かべられていた。私は先生の両手を握られずにはいられなかった。ふと周りを見渡すと静かに少しうつむき加減でおやつを口に運んでいる入居者の皆様。この国の高度成長期、O先生と同じようにそれぞれの場所で懸命に生き抜いてこられたのだろう。その証として私達は素晴らしい教育や経済大国として豊かな生活を享受していることに改めて感謝した。

O先生はそれから三週間後、眠るように旅立たれた。きっと今頃天国で得意のスポーツに興じてるに違いない。